

令和4年度第2回霞ヶ浦自然観察会実施結果

日 時：令和4年5月21日（土） 10時00分から12時30分まで

テーマ：霞ヶ浦にはどんな魚がいるのだろうか

場 所：自然再生I地区（センター下）の霞ヶ浦湖岸及び堤脚水路

講 師：中村 誠 先生（元茨城県内水面水産試験場職員、当センターパートナー）

担当職員：小幡和男、小川達己、久保谷秀明、齋藤 均（4名）

参加者：32名

パートナー：8名

結 果

センターに10時に集合し、すぐに徒歩で観察地に向かいました。この時期のハス田ではハスの植え付け作業の真っ最中で、その作業を間近に見ることができました。天候は怪しい空模様でしたが、観察地に着くまでは降られなかったものの着いた瞬間から強い雨が降ってきてしまい、15分くらい雨宿りをしながら天気の回復を待つこととなりました。

小雨になったのを見計らって、いよいよ観察開始です。参加者は全員、たも網を持って水路で魚を採集します。子どもはもちろん大人も童心に帰ったように夢中になっていたのが印象的でした。何種類かの小魚やエビ類、ウシガエルのおたまじゃくしなどを捕ることができ、捕った魚は泥から分けてバケツに入れておいて、あとでみんなで観察しました。

何回かたも網で採集した後、パートナーによる^{とあみ}投網の見学をしました。霞ヶ浦の湖岸で実際に投網を打って魚を捕る様子を見ることは、なかなかできることではありません。あいにくの悪天候のためか、大きな魚は捕れませんでした。小さな魚やエビ類がたくさん捕れました。

たも網や投網で採集した魚を持ち寄り、その中から主な魚やエビ類を、講師の中村先生に、解説していただきなした。1種類ずつミルソーに魚を入れ、参加者全員に見えるように示し

てもらいました。子どもたちのきらきらしたまなざしがとてもまぶしかったです。先生は、魚の名前だけでなく、その姿の特徴や生態についてわかりやすく解説してくれました。中村先生ありがとうございました。

最後に、採集した魚を水路に放流して、観察会を終わりにしました。魚の採集を始めた時はまだ小雨が降っていましたが、やがて雨も上がり、観察会が終わるころは雨の心配のないような天気になりました。参加者の皆様、たいへんお疲れさまでした。

観察した魚など

ツチフキ・・・この魚はもともと霞ヶ浦には分布しておらず、ほかの地域から持ち込まれた。えさを泥ごと飲み込み、こしてから土を吐くので、この名が付いた。

ギンブナ・・・霞ヶ浦のギンブナはメスしかおらず、他の魚の精子で発生が起こる。霞ヶ浦には、フナの仲間は、ギンブナ他キンブナ、ゲンゴロウブナなどがある

タイリクバラタナゴ・・・中国などから持ち込まれたと考えられる外来種の魚。

ウシガエルのおたまじゃくし・・・成体になるまで2～3年かかる。食用として大正時代にアメリカから持ち込まれた。特定外来生物に指定されている。

テナガエビ・・・霞ヶ浦にすんでいる普通のエビ。食べるとおいしい。重要な水産物。

スジエビ・・・からだに黒っぽい縞（スジ）があることでテナガエビと区別できる。

ブルーギル・・・小さなときに横縞があるのが特徴。大きくなると消える。ギルはえらの意味で、ブルーギルの名前はえらが青いことによる。オオクチバスとともに問題の大きい特定外来生物。

ボラ・・・海で生まれ、川や沼に上ってくる魚。

アメリカザリガニ・・・ウシガエルのえさとして持ち込まれたのが最初。

モツゴ・・・クチボソとも呼ばれ、口が受け口なのが特徴。

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）・・・水面から離れたところに赤っぽい特徴的な卵を産む。イネなどの農作物を食害するので問題になっている外来種。

第2回霞ヶ浦自然観察会



センターから観察地への移動



参加者がたも網で採集



採集した魚をバケツに集める



パートナーが投網で採集



投網の収穫物を集める



講師による解説



ミルソーに魚を入れて観察する



採集した魚を放流して観察を終了する